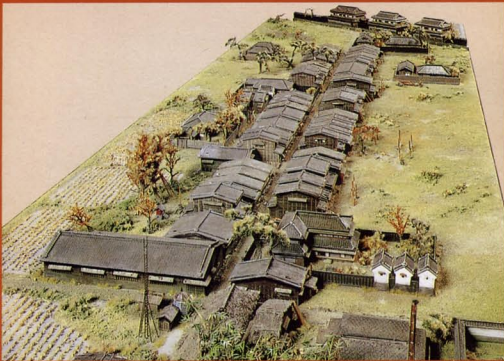


下谷龍泉寺町 -「たけくらべ」ゆかりの地-



下谷龍泉寺町 茶屋町通り家並模型 (1/300) 考証上島金太郎一葉在住当時の街並を上島氏の考証を基に和田芳恵氏、塩田良平氏等の意見を加え区が工芸社に依頼して製作した。

樋口一葉の名作「たけくらべ」は、明治26年7月から翌年5月までの約10か月の間、一葉が在住した下谷龍泉寺町を舞台に書かれた作品です。当時の龍泉寺町は、商家の町で、吉原遊廓相手に商売や内職をする者たちや遊廓で働く者が兼業するなどして、約2,000人が暮らしていました。ここで暮らす人々の生活は極めて貧しく、多くの人が長屋住まいをしていました。

一葉の生活もその例に漏れず、二軒長屋で荒物雜貨や駄菓子店を商う小さな店を開いていました。間口2間（約3.6m）の小さな店は繁昌しませんでした。この地で生きる人々の声や生活に直接に接した体験が、のちに「たけくらべ」などの傑作を生み出す源になったと言えます。

現在、下谷龍泉寺町は台東区竜泉へと名を変え、一葉が生活した長屋も旧居跡碑へと姿を変えてしまいました。しかし、この地には今なお昔ながらの風情が残り、祭りや酉の市が年中行事として根付いており、季節の移り変わりごとに「たけくらべ」の世界を偲ぶことができます。



樋口一葉旧居跡碑（竜泉3丁目15番先）



発行 台東区観光課 〒110-8615 東京都台東区東上野4-5-6
TEL. 03-5246-1111 (代表)
<http://www.city.taito.tokyo.jp>

協力/台東区立一葉記念館



樋口一葉について

樋口一葉（本名「奈津」）は、明治5年3月25日（陰暦）、父・則義と母・多喜の次女として生まれました。小学高等科第四級を首席で修了するなど、幼い頃から非凡な資質を現しましたが、母の「女子に学問は不要」という考えにより、進学を断念しました。このことを不憫に思った父は、中嶋歌子の主宰する歌塾「萩の舎（はぎのや）」に入門させて本格的に和歌を学ばせました。それでも一葉は、才能を如何なく発揮し、入門半年後の初めての発会で、先輩たちを相手に最高点を取りました。一葉は、その後も努力を重ね、四千首を超える和歌を残しました。

しかし、長兄の泉太郎と父が相次いで他界し、わずか17歳で戸主となった一葉は、明治21年6月、「萩の舎」の姉弟子であり、友人でもあった田邊花圃（たなべかほ）が処女作「藪の鶯」を出版し、多額の手稿料を手にしたことを知り、母と妹くにとの女3人の生活を小説で支えていくことを決意しました。

本気で小説家を志すようになった一葉は、『朝日新聞』の小説・雑報記者の半井桃水（なからいとうすい）を訪ねました。妹の知人の紹介で、半井強引に弟子入りした一葉は、桃水に小説執筆の手ほどきを受け、明治25年3月、桃水が創刊した同人誌『武蔵野』に処女作「闇桜」を発表しました。

人気作家で面倒見の良い桃水に一葉は恋心を抱きましたが、桃水との仲を疑う、歌の師匠・中嶋歌子や「萩の舎」の友人から忠告を受け、明治25年6月、桃水のもとを離れる決意をしたのでした。

その後も一葉は執筆活動を続けましたが、思うようにいかず、生活は困窮を極めました。小説で生計を立てることが困難である



渡辺松太郎作（複製）
原品は日本近代文学館所蔵、机は父則義が買いつけたもので、かゝりの彫刻のある筆立ては馬場狐蝶父八から贈られたもの。



と覚った一葉は、新吉原近くの下谷龍泉寺町（現在の台東区竜泉）に転居し、荒物駄菓子店を開きました。

当時の龍泉寺町は、吉原遊廓に生活の糧を依存する人々や極めて貧しい生活を送る人々が暮らしていたため、一葉は自らを転落の身と捉え、しばらくの間「萩の舎」や友人たちとの付き合いも避けていました。

しかし、この町で社会のどん底に生きる人々の生活に接したことで、社会や人間を本質的に見る目が培われたのです。この時期の生活体験が、小説家・樋口一葉を大成させたと言っても過言ではないでしょう。

こうした中、一葉のもとへ『文学界』への寄稿依頼が舞い込んで来ました。一葉は商いの合間を縫い、寝る間も惜しんで「琴の音」や「花ごもり」を書き上げました。一方、向かい側に駄菓子屋が開店したこともあり、商売は先細りしてゆき、ついに一葉は店を引き払い、下谷龍泉寺町を後にしました。

本郷丸山福山町（現在の文京区）へ転居した一葉は、集中的に執筆活動を続け、明治27年7月、『文学界』に「暗夜」を発表しました。その年の12月に「大つごもり」を発表し、翌月から連載を開始した「たけくらべ」が完結する明治29年1月までのわずか14か月の間に、「うつせみ」「にこりえ」「十三夜」など数々の傑作を世に送り出したのです。のちにこの期間は「奇蹟の14か月」と呼ばれるようになりました。

明治29年4月には、「たけくらべ」が『文芸倶楽部』に一括掲載され、森鷗外や幸田露伴らに絶賛されましたが、一方で結核の兆候が表れ、病状も日に日に悪化していきました。そして、同年11月23日午前、一葉は24年の短すぎる生涯を閉じたのです。わずか四年あまりの作家人生の中で、類いまれな輝きを放ち、その後一瞬にして消えていった一葉の人生は、まさに流星のようだったと言えるでしょう。

台東区立一葉記念館

樋口一葉の代表作「たけくらべ」は、一葉が下谷龍泉寺町に住み、荒物駄菓子屋を営んでいた頃の体験を元に書かれた作品である。一葉の功績を後世に伝えるべく、有志を集った地元住民の働きかけに、台東区が応える形で昭和36年5月、女性作家の記念館としては日本初の一葉記念館が開館した。その後、施設の老朽化や一葉肖像の五千円札の発行を機に改築され、平成18年11月1日に一葉記念館は新しく生まれ変わった。当館では、「たけくらべ」をはじめとする一葉自筆の草稿、歌人としての一面を見ることができる歌稿や短冊、生前に交わした書簡類の他、一葉の人生を知る上で重要な手掛かりとなる資料を数多く収蔵、展示している。

〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4
TEL. 03-3873-0004 FAX. 03-3873-5942
<http://www.taitocity.net/taito/ichiyo>

- 開館時間：9時～16時30分（入館は16時まで）
- 休館日：月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始および特別整理期間等
- 入館料：一般300円（200円）／小・中学生100円（50円）
※（ ）内は、20人以上の団体料金
- アクセス：東京メトロ日比谷線三ノ輪駅（1b出口）徒歩8分
つくばエクスプレス浅草駅徒歩15分

其の七



瀧澤康裕画「一葉肖像画」一葉記念館蔵

樋口一葉ゆかりの地へたけくらべを訪れる

台東ぶらり散歩

よるのぼろやうなひと

台東区